

武蔵野幕屋49周年記念祭 祈祷会

わが詩の路

――イザヤ書第42章5～13節――

1989年9月24日

小池辰雄

「山路こえて」（独唱） 私の詩の導者は聖霊 詩を通しての戦い 本当の詩は現実 わが人生は讃美歌 本当の伝道は死を通す 本ものになれ 自分の信仰や実存を気にするな 武蔵野幕屋は絶対に滅びない 我々自身がキリストの詩となる

【イザヤ42】

5 天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの^{なりいもの}産物とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う。6 云く、われエホバ公義^{ただしき}をもてなんじを召したり。われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし異邦人のひかりとなし、7 而して^{めしい}瞽の目を開き^{とらわれびと}俘囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを檻^{おり}のうちより出さしめん。8 われはエホバなり、是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあたえず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。9 さきに預言せるところはや成れり。我また新しきことをつげん。事いまだ兆^{きざし}さざるさきに我まずなんじらに聞かせんと。

10 海にうかぶもの海のなかに充^みつるものもろもろの島およびその民よ、エホバにむかいて新しき歌をうたい、地の極^{はて}よりその^{ほまれ}頌美をたたえまつれ。11 荒野とその中のもろもろの^{まち}邑とケダル人のすめるもろもろの村里はこえをあげよ、セラの民はうたい山^{ほまれ}のいただきよりよばわれ。12 栄光をエホバにかうぶらせ、その^{ほまれ}頌美をもろもろの島にて語りつげよ。13 エホバ勇士^{ますらお}のごとく出た^{いで}もう。また戦士^{いくさびと}のごとく熱心をおこし、声をあげてよばわり大能^{ちから}をあらわして仇をせめ給わん。

●「山路こえて」（独唱）

私は讃美歌404番「山路こえて」を、記念告白という意味で、歌わせていただきます。私の現に歩いている路の告白のような歌のひとつですから。（独唱）

1. 山路こえて

ひとりゆけど、

主の手にすがれる

身はやすけし。



2. 松のあらし、
谷のながれ、
- みつかいの歌も
かくやありなん。
3. 峯の雪と
こころきよく、
- 雲なきみ空と
むねは澄みぬ。
4. みちけわしく
ゆくてとおし、
- こころぎすかたに
いつか着くらん。
5. されども主よ、
われいのらじ、
- 旅路のおわりの
ちかかれとは。
6. 日もくれなば、
石のまくら
- かりねの夢にも
み国しのばん。

私は詩を書きはじめていますが、その気持のひとつをこの歌がよく表しているので、歌わしていただきました。もちろん、詩の内容について、今日は申し上げるわけではありません。地上の生涯における最後の段階にきたものですから、本当にこれに打ち込んでいます。野尻で一か月暮らしましたが、そこでも書きました。家内がちよつと調子が悪かったですが。いろいろなことにでつくわしても、逆に聖霊の力がはたらくので、本当にありがたい。私は行き詰まりを本当に知りません。このキリストの御霊というのはなんという、凄い力をもっているか、光をもっているか、生命をもっているか、知恵をもっているかと。表現できないです。

●私の詩の導者は聖霊

私の詩は、申し上げているとおり、聖霊の導きによって動くので、その導者はベアトリーチエでもマルガレーテでもありません。そういう、世界に例外的な詩を書かしめられている。ダンテは地獄を書いた。あの地獄にかなう『地獄篇』は書けません。大変なもんです。私は私らしいのを書くわけです。藤井先生とも違います。もちろん、ダンテやゲーテみたいな大詩人には、そういう詩的な意味においてはとてもかなうとは思っていませんけれども、内容的には負けないつもりです。

ということは、私がんばるのではなくて、御霊がそのように、もの凄い迫力をもって臨んでくださるから、詠わざるを得ない、書かざるを得ない。何年かかるか、正直、分からん。12年というておりますけれども、果たして12年で書きおわるかどうか。とにかく、たとえば書きおわっても、それは未完成である。また、未完成であつても、それはひとつの完成をもっている。そういう質^{たち}の詩です。ですから、決してうるたえない。焦らないです。

イザヤ書42章に「新しき歌」という言葉がある。

「9」さきに預言せるところはや成れり。我また新しきことをつげん。事いまだ兆^{きざ}ざるさきに我まざるに聞かせんと。



10 海にうかぶもの海のなかに充^みつるものもろもの島およびその民よ、
これは地中海を思っているらしい。

エホバにむかいて新しき歌をうたい、地の極よりその頌^{ほまれ}美をたたえまつれ。

このイザヤ書42章10節は素晴らしい句です。ここに、「海、海」と出てきますが、私の兄は非常に海が好きでした。十月であろうと海を見れば、飛び込む。それくらい海が好きだった。私にくれた兄の手紙の最後の句に――私は書斎にその一句を掲げてあるんですが――「海を見る心地がする」と書いてある。不思議な句で終わっている。

それで、私は特にこの頃、「天海」と号している。これは「禅海」というとんでもない人物がいた。しかしながら、小説『恩讐の彼方』にも書いてあるように、彼は金槌とノミひとつでもって、あの青の洞門をとうとう掘ってしまった。あれがちょうど12年かかっている。親の仇を討とうした実之助が、この禅海の前に平伏してしまった。

「どうぞ私を斬ってくれ」

という禅海に対して、抜いた刀がヒラリときらめいたと思ったら、彼は自分のもとどりを切ってしまった。

「参りました！ あなたには」

と。むしろ、禅海の門弟になったという素晴らしい話です。何年もかかって、仇を討とうと日本中を歩いて最後に見つけて、これはしめたと思ったところが、どっこい相手は、極悪人みたいな相手がもう本当に聖者になっていたからね。あの禅海和尚のことも、もちろん私の詩の中に出てきます。

●詩を通しての戦い

藤井先生は『羔の婚姻』という素晴らしい詩をお書きになりました。一つ一つの歌は素晴らしい。また、あれだけの詩形を新しく作られた。しかし、日本の詩人の名簿の中には藤井先生の名前はない。全く例外者だ。いわゆる詩人の群ではない。そこが藤井先生の藤井先生たるところです。あの詩は未完成で、あと2年、先生は生きていれば、完成したんですけれども。43歳で仆れた。大変なひとです。藤井先生のその気魄、気持には、私は私の詩^{うた}をもってお応えするつもりです。

私は藤井先生にもでつくわした。手島郁郎にもでつくわした。詩の旅ですからね。それはどういう旅だかは言いませんけれども。とにかく、そういう意味で、詩を通して戦う。

「リバーレ エスト ミリターレ」(生くるは戦いなり)

という。皆さんも、男であろうと女であろうと、言葉の深い意味においては、戦いです。自分自身に対する戦いであり、また、サタンの勢力に対する戦いである。日本はこんなことをしてたら、正直、滅亡に向かっている。

キリストは本当の勇士です。十字架に架かって、人を全部担ってしまうような、こんな



勇士は他にいないんだ。それはもう、キリストは最大の勇者です。ケタちがいです。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と。これは義の世界です。

「この義が倒れてたまるか」

というのがあの叫びですから。天地を貫くところの^{だいおんじょう}大音声です。

「あれは詩篇22篇の最初のことを言つて、それから後のことがずっとキリストには

本当はあつたんだ」

なんて、余計なことを註解書は言う。そんなことはいいんだよ、あの一句だけで。あの叫びがなかったら、神の義は立たない。神の義に対するキリストの叫びです。義が同時に救いであるということ。義の叫びが同時に救いである。全部、担つてしまっているんだから。義と愛とが本当に一つになっている。お釈迦さんの大慈大悲と違うんです。それはもう東西古今の最大の勇者はキリストですから。

どうぞ、そういうことで、あなた方は勇ましくやってください。私なんかは、生まれつきは本当に臆病者の弱虫なんです。私の詩にある通りです。それがこういうことになっちゃったんだから、この御霊の力でね。私の亡くなった兄貴は本当に生まれつきの勇者です。彼は喧嘩すると本当に強かった。喧嘩のガキ大将くらいなんです、信仰に入る前の中学時代までは。親父から怒られて、

「出ていけ！」

なんて言われた。そして、本当に出ていってしまったって帰ってこない。それでもつてまた親の方で心配してた。

● 本当の詩は現実

まあとにかく、風と同じですよ。無風。本当に無風で非常に静かである。と同時に、嵐にもなる。そよ風にもなる。それが本当の気の世界なんだ。気、風、霊。ヘブライ語ではこれはみんな同じ字ですから。正に

「天地正大の気」

なんだ。藤田東湖のあの詩は素晴らしい。私は、

「わが詩^{うた}の路^{みち}」

なんて言つたつて、なにも自分のことだけを言っているのではない。あなた方自身が本当の「詩の路」を歩いてください。なにも詩を書かなくなつたつていい。全的な境地でもつて現世を生きているのが、その人自身が活ける詩なんです。ノバールスが、

「本当の詩は現実だ」

と言つたのはその意味なんです。

「詩を現実とする。現実を詩とする」



これが究極の世界なんです。預言者の言葉が全部、詩ですから。キリストの山上の垂訓も、山上の大告白も散文詩です。パウロのコリント前書13章も15章もみんなこれは詩ですよ。黙示録がそうです。

人類の初めの言葉は詩であると同時に、終わりの言葉も詩である。童謡が素晴らしいのはその意味です。

「音楽の始めと終わりは民謡である」

という。ベートーベンの交響楽も、それが本当はもとになっているんだということです。ということは、本当の単純なまことの世界はみな詩である。

我々の詩は何かというと、讃歌です。讃美歌なんです。だから、我々の生涯そのものが讃美歌なんだよな。あなた方は讃美歌を歌うときに、本当にそのつもりで歌ってくださいよ。私はさっきの讃美歌

「山路こえて」

をそのつもりで歌いました。もう歌っていると、なにか天界に入っちゃっているような気持でね。讃歌をくちずさむ。私は集会でくちずさんでいるんですよ。楽しいね、本当に。

くちずさんでいるうちに、まるでそれが祈りになってしまってたね。それで、

「主さま、お休みなさい」

というわけだ。

「睡眠ができない」

なんていうことはないんだ。薬なんかやめてしまえ。薬は大体、毒なんです。瞬間的には効くかもしれませんが、けれども。なにも、お医者さんに言われているのを、すぐやめろと私は言ってます。しかし、奥の世界で、祈っているというと、なんか薬を飲みたくなくなったら、本当にそうになったら、薬を飲まない方がむしろかえって良くなる。ヒポクラテスがそう言っているんだ、

「自然の力と、頂いている本来の力により頼め」

と。

●わが人生は讃美歌

どうぞ、あなた方が自身「わが詩の路」を「わが讃歌の路」を、

「わが人生は讃美歌である」

といて進んでください。

「歌いつつ歩まん」

という聖歌があるね、正にそうなんだ。歌いつつ歩まんです。どんな事にあっても、「歌いつつ歩まん」だよな。やせ我慢ではないですよ。本当の感謝なんです。

心から讃美していると、歌っている声の質が変わってくる。うまいまずいではない。霊



歌的な質になってくる。

「私はどうも歌がまずくて」

なんて、まずいも何もありはしない。歌えばいいんだ。キリストは聞きたもう。そうすると、知らないまに歌えるようになったちゃう。絵がまずいと思ったら、絵が描けるようになったちゃう。オルガンがまずいと思ったら、オルガンが弾けるようになったちゃう。

なんでもそうなんです。これはもう本当に秘訣ですからね。聖霊は秘訣を私たちに与えてくれる。ミステイク、神秘。ミスティッシュ・クラフト、秘訣の力。これを体験しなかったら、もつたいないよな。

もちろん、いろいろなことを勉強することは大事です。技術を鍛えることも大事です。それは、しかし、どこまでも副的なことなんです。本当の主は、本当の主的なことは、御霊を受けることです、神の力を。天を相手にすること。これは皆さんが段々、体験していraftしやると思う。そうすると、歌わざるを得ない。生活が歌ならざるを得ない。

私の二番目の娘には、

「エホバはわが歌なり、わが力なり」

という詩篇118篇の句から、歌子とつけましたけれども。

● 本当の伝道は死を通す

さつき、どなたかが

「うちの人もなかなか導かれないで…」

なんて仰ったけれども、私なんかもダメなんです。親しい人がさっぱりダメなんです。ナザレのイエスさえ故里を出てしまった。

「なんだ、あれは少し変わっているな。言うこと為すことがおかしい」

なんて。

「家の者が敵である」

とキリストが言われた。キリストの言葉は激しいからね。

「自分は平和をもたさんためではなく、^{つるぎ}剣を投ぜんために来た」

とキリストは言ったでしょ。本当の味方にするためには、みんな分裂が来てしまう。しかしながら、

「分裂は分裂でいいよ、今度は本当にそれを抱いてしまうから。いい加減な抱き方ではないんだ。いい加減な平和ではない。神さまとの関係を、神・キリスト・我の縦の関係を、本当に平安を立てろ。そのためには、横つちよなんかどうでもいい」というのがキリストの心なんだ。そうすると、その横つちよに嫌われていたのが逆に、横の人たちが、

「どうも、あれは凄いな」



と段々、火に集まってくる魚みたいになる。地上では、それはできないかもしれない。けれども、その人が往つてしまつてから、

「やつぱり本当だった」

ということになる。いいよ、それでも。本当の伝道は死を通すんだ。私の兄貴は本当の伝道を彼の死を通して私にした。ただ私一人に。それがまた段々広がった、というのはなしです。家族、親戚に一人もない。私だけ。まあ、人生はそういうもんですよ。

●本ものになれ

キリストの弟子は12人いたけれども、結局は四人だよな。それが新約聖書だ。数ではないです、質なんです。

「本ものになれ」

ということです。

「二人の本ものがいたら、エルサレムを許すぞ」

と、エレミヤに神さまは言った。「では、何が本ものですか」なんて。説明なんかできません。

「これこそは本ものだ」

と、全存在で納得できる世界です。人間だから、100%本ものではないですよ、100のうちの10%しか。その中に本ものがなくても、この本ものがマイナスの90をやつつけるんです。心配いらん。そんなものは問題でなくなる。そういう、いわゆる数学をのりこえた世界が天の数学の世界なんです。そういうことを聞いて、楽しくないですか。本当だから。私はウソを言つてないから。いいかね、人のおもわくなんか気にするな。はつきり動け。そうしたら、

「参った!」

ということになりますから。

私は学校でもつと勇敢にやればよかった。

「学校では伝道してはいけない」

なんていう意識があつたものだから、私はだいたい遠慮したけれども、しかし、言うことに水は割らなかつた。だから、あとから、

「やつぱり小池先生の言つたことは、あの時はなんだか分からなかつたけれども、

あれはやつぱり本ものだった」

と、卒業生が時々言うものな。それは、人間の魂は本ものにぶつかると、何か感ずるわけなんです。理屈の世界ではないから。

●自分の信仰や実存を気にするな

皆さん、



「自分の信仰がどうだ、今の実存がどうだ」
と、そんなことは気にしなさんな。

「なんか知りませんが、私はうれしくてしょうがないんです」
と、それが本当の感話なんだよ。

「力が来てしょうがないんです」
と、それでいい。

「滑ったり転んだりしますけれども、大丈夫です」

と、言えなくてはだめだ。それは、キリストに圧倒されているから、言えるんです、自分の信仰ではない。

自分の信仰なんか当てにするな。

「太陽はまあしょうがないから、蛍光灯をつけておこう」

とか、

「蠟燭を灯そう」

とか、そんな世界だよみんな、自分の側を考えているのは。窓を開けて太陽の光を入れれば、それでいいんだ。こっちはゼロでいい。闇が光になっちゃう。闇を排斥するのではない。闇の世界を光にしちゃうんだ、この太陽が。太陽のある所に闇はない。

法然が、どうしても煩悩に勝つことができてなくて、とうとう、

「南無阿弥陀仏」

になった。親鸞も「南無阿弥陀仏」。その中に自分を投げ入れたから、親鸞も法然も素晴らしいことになった。如来の光が彼らをとおして光りだした。

「煩悩なんかを問題にしなくても、光りだした。知らないまに影がなくなっちゃった」

と、こういうわけです。クリスマスはキャンドルサービスというのがあるが、自分自身がキャンドルにならなくてはな。

「私はキリストのキャンドルです」

と。

「汝らは世の光なり」

とキリストは言われた。その言葉を本当に受けとっているかだ。

「自分で光になれません。キリストはそういったけれども、なかなか光になれません」
なんて、何を言っているか。キリストの光をいただければいいんだ。

「私がお前の中で光となるから。だから、お前たちは世の光なんだ」

と。だから、

「アーメン、ハレルヤ！」

と。それでいいじゃないですか。そういう、単純なバカにならなければダメなんですよ。



みんな利口すぎる。私は、それこそ良寛が言ったように、大愚です。大バカ三太郎になればいい。

「神の愚かは人の賢きよりも上だ」
とパウロが言っている。

●武蔵野幕屋は絶対に滅びない

この秋の京都特別集会での「ガラテヤ書のパウロ」は凄いよ。この集会には、何があったつていいから、来なさい。

「この世の仕事があるから、ちよつと都合が悪い」

なんて、何が「都合が悪い」か、そんなもののほつたらかして来い。それだけの気魄がなければ、福音の世界で本当に戦えないぞ。私はそれだけの福音のために戦っているんだ。それを

「都合が悪い」

なんて言うのだったら、やめたらいい。

「そのうちに録音で聞くから」

なんて、何を言っているか。

創立49周年に私は火のごとく叫んでいるんです。ですから、私の詩は烈々たる詩です。今ここに居る若い人達は、一人ひとりみんなそれぞれの善さをもっています。よく分かっています。是非、キリストから賜ったそれで動いてください。武蔵野幕屋は絶対に滅びないです。いいね。

「千万人といえども我ゆかん」

という孔子の言葉は、そのまま行けます。大丈夫。孔子以上に。

私はこの夏、少しプラトンも読んだけど、プラトンも限界がある。大したことない。ギリシヤ哲学は素晴らしいけれどもね。それは何といったって、キリストの光で見たら、しょうがないです。御霊の世界はとにかく素晴らしい。

だから、新約聖書は凄いね、本当に。無駄がない。皆さん、聖書を身体で本当に読みなさいよ。私はこの第十巻『聖書は大ドラマである』（1988年刊）は、そういう意味でもって書いたんだからね。

●我々自身がキリストの詩となる

結論は、申し上げたとおり、

「我々自身がキリストの詩^{うた}となっていきましょう」

と、そういうことです。キリストを讃美せざるを得ない。どんな事にでつくわしても、いや、いろいろな事にでつくわせば、逆に讃美する。御霊の力がくるから。いろいろなことにで



つくわして、

「ああ、困った」

ではだめだよ。人間的には、「困った」という感情もあるでしょう。しかし、困らないんだ。

「困ったけれども、さっぱり困らないんだ」

という、そういう世界をぜひとも体験してください。

「まあ、先生は85歳になつたから、そういう境地でしょうが、我々はまだちょっと

先が遠すぎる」

なんて、何も遠くはないよ。早く、どしどし、私なんか乗り越えてください。

私の話は矛盾してるだろ。怒ったかとおもったら、大いにもちあげてみたり。どっちも本当なんだ。それが本当のディアレクティーク（問答法、弁証法）なドラマの構造だ。人間はそういうものだ。それは本当に愛すればこそその私の激しい言葉なんだ。

「先生にあんなに言われると、私はしょうがないな。京都（秋期特別集会）に行かなくてはならないな」

なんて。いいよ、来なくたって。京都に来なくたっていいよ。しかし、

「私の気合はそこにある。よし、私は行くぞ」

と、どっちでもいいよ（笑）。まあね、困ったもんだ。あなた方を信ずるから、私はもう思うとおりなんでも言う。それは、普通の人になんか何を言ったら、

「あれはちょっとおかしいのではないか。なんか矛盾しているようだ」

なんて。はつきり矛盾しているよ。いわゆる平面的なことは言ってられないんだ、この福音の世界は。しかし、来てみれば、

「やっぱり、先生の言うことは本当だった」

ということが分かる。まあ、そこらにしておきましょう。あとは、あなた方の自由にまかせるから。

とにかく、この「わが詩の路」というのはあなた方自身のことです。私だけではない。

「わが人生は神讃美のみ、キリスト讃美のみ。涙の中から語らざるを得ません」

と。やせ我慢の讃えではないよ。涙あればこそその讃美でございませう、ということです。虹のように。あそこに

「天涙」（雅号）

と書いたのはそのことなんです。天の雨は虹を現する。私の書斎には虹の写真が飾ってある。毎日見ている。

それでは、祈りましょうかね。理屈はいらんよ。もう全存在で、

「主さまー」

と祈り入ることです。

